

もくじ

中学生の部

最優秀賞	臨時休校を経て伝えたいこと	鯨井中学校	2年	井田 灯南	2
優秀賞	楽に生きよう	川越西中学校	2年	奥富 晴菜	3
優秀賞	「地球の環境を守ること」とは	鯨井中学校	2年	井田 那南	4
入選	コロナウイルスの二次被害	東中学校	3年	神田 萌愛	5
入選	正しいコミュニケーションの取り方	東中学校	3年	淵上 蒼太	6
入選	「ことば」は「心」	砂中学校	3年	奥谷 玲	7
入選	命の差と共生	川越西中学校	2年	佐藤 理恵	8
選評	.....	.....	.....	.....	9
応募者名簿	.....	.....	.....	.....	10

# ◆最優秀賞◆

## 臨時休校を経て伝えたいこと

鯨井中学校

2年

井田 いだ

灯南 ひなみ

みなさんは、学校での学習をどう思っていますか。おそらく、好きで楽し  
いと感じている人もいれば、あまり好きではない、面倒だと思っている人も  
いるでしょう。私はもともと学校に行くこと、学校で学習することが好き  
ですが、今回の臨時休校の期間を通して、学校での学習の大切さやありがた  
みを身に染みて感じるようになりました。

二〇二〇年二月末。新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、  
私たちは休校を言い渡されました。急な発表だったので、一年生で学習する  
はずだった内容を残したままとなってしまいました。さらに、四月には再開  
するだろうと思っていたら休校は長引き、三カ月も学校での学習の機会を奪  
われてしまいました。だからこそ、六月になって久しぶりに授業を受けたと  
き、自主学习とはこんなにも違うんだ、より集中できるんだと驚いたのを覚  
えています。

今まで学校生活は、当たり前にあるものでした。なぜなら、小中学校での  
学習は「義務教育」として、原則誰にでも与えられるものだからです。今回、  
私はその必要性が分かったような気がします。

でも、私は学校生活において学習だけが大切だと思っているわけではあり  
ません。部活動や係・委員会活動、清掃や給食、クラスで何かに取り組むこ  
と、友達と話すこと。その全てが重要で、私たちを確実に成長させてくれる  
ものだと思います。家庭内では経験できない集団生活によって、接する人が  
増え、社会性を養うことができると感じているからです。

さて、日本では学びの場が当たり前提供されていますが、世界に目を向  
けてみるとどうでしょうか。世界には、学校に行けずに働いている子どもた

ちがたくさんいます。みなさんも、社会の授業で習い、知っているかと思  
います。では、そのことについて詳しく考えたことはありませんか。想像して  
みてください。今当たり前にある、学校生活が無かったら。「勉強しなくて  
いいんだ、楽だな。」と思った人はいますか。でも、そう考えてしまうのは、子  
どもなのに働かなければならない苦勞を知らないからではないでしょうか。  
私たちは学校に行くことができ、本当に幸せなのです。学校生活がもし無  
かったら、私たちは字を知らず、友達も知らずに生きていくかもしれませ  
ん。私が今一番伝えたいこと、それは当たり前のように学校に行けるのはとて  
も幸せで、ありがたいということ。今回の新型コロナウイルスのような  
感染症によって学校が休校になったり、そもそも学校に行けない子どもたち  
が世界にいたりする中で、学校で勉強をし、生活できる大切さに気付いま  
した。

今なお、新型コロナウイルス感染防止の動きは続いています。今後、終息  
することを願ってはいますが、さらに感染が拡大し、また休校となってい  
る可能性も少なくありません。そして、これは新型コロナウイルスだけに言  
えることではないと思います。だから、学校に行けるときに、精一杯、でき  
ることをやるのが、今後、もしかしたら重要になってくるのかもしれない  
んです。

どうなるのかは分かりませんが、私はこんなことを願っていようと思いま  
す。  
全ての子どもたちが、早く当たり前学校生活を送ることが出来ますよう  
に。

# ◆ 優秀賞 ◆

## 楽に生きよう

川越西中学校

2年

奥富 晴菜 おくどみ はるな

私が中学校に入学してから、一年三カ月が過ぎた。そこで思うことは、中学生は忙しいということだ。部活の朝練があるときは、朝七時半には学校に着き、授業に給食、そしてまた部活、家に帰るのは夕方六時を回っている。土曜日にも部活があるのだ。

日本では、原則として一日に八時間、一週間に四十時間を超えて働いてはいけないという法律が定められている。私は中学生で、労働者ではないけれど、休み時間や給食の時間を抜いたとしても、学校にいる時間が長すぎると思う。そこで働く先生たちは、ブラック企業並みに大変だ。

家につくと、夕飯を食べてすぐ塾や習い事に行く人もいて、中学生は本当に忙しいのだ。だから私は、布団の中に入り、眠る瞬間がとても幸せである。

日本人は、真面目で頑張りすぎる傾向にあると思う。忙しくがむしゃらに働くことが良しとされて、休暇を取ったり、リフレッシュなどで自分のために時間を使ったりすることは、なぜか良く思われぬ。私はときどき、学校を休んで、一日中好きなことをしてゆっくりしたいと思うことがある。でも、「みんなも頑張っているのだから」という考えが、休みたいという気持ちにブレーキをかけるのだ。人それぞれ、頑張れる力量は違うのに、周りの人と同じようにしなくてはと思ってしまう。

忙しいという漢字は、心をなくすという意味があると聞いたことがある。私は一生懸命毎日を過ごすうちに、何かに感動するゆとりが持てなくなった

ように思える。

そんな私にも疲れた心をリセットできる場所がある。茨城の母の実家だ。高速道路を降りると、景色がガラリと変わり、緑の田んぼが広がっている。夏にはセミやカエルの声がとにもぎやかだ。和室の畳の香りがなつかしい感じがして、祖母の手料理もとてもおいしい。時間がゆっくり流れている感じがするのだ。たった一日でも、祖父母の家で過ごす、のんびりした気持ちで色々なことに気付くことができる。また明日から頑張れそうな気になる。これから先、生きていく上で自分なりのリフレッシュ方法を見つけることは、とても大切だと思う。休むことは、時に批判を浴びるかもしれないが、長い目で見たら、結果的に自分を守ることにつながるのではないか。限界を迎える前に、休む勇気をみんなが持てたら、また、それを温かく見守れる社会になったら、人はもっと楽に生きられると思う。

私の家では、頑張れと言う代わりに、頑張っているね、と声をかけ合っている。頑張っている自分を認めてくれている人が近くにいるだけで、ほっとするのだ。

中学生は忙しい。日本全体が忙しい人であふれている。休むことは決して怠けるということではなく、自分を大切にすることだと伝えたい。自分の心を休ませる場所や、方法を見つけて、この先の長い人生をもっと楽に生きていこう。

# ◆ 優秀賞 ◆

## 「地球の環境を守ること」とは

鯨井中学校

2年

井田 那南 いなみな

「プラスチック製レジ袋を有料化する。」

このニュースを知って驚いた人も少なくないことでしょう。これはプラスチック製品を使用する機会を減らし、地球の環境を守るための工夫の一つなのだと思いますが、私はこの「レジ袋有料化」については反対です。

その理由は大きく分けて二つあります。

一つ目は、ほかのプラスチック製品の消費が増える可能性があると思うからです。

例えば、スーパーマーケットでもらったプラスチック製レジ袋を、ゴミ袋として利用していた、という人もいないでしょうか。しかし、レジ袋が有料化されたことによってレジ袋をもらわず、代わりにゴミ袋をたくさん買ってしまおうようになる、ということもあると思います。このように、レジ袋を使わなくなった分、ほかのプラスチック製品の消費、そして廃棄が増えてしまうのではないかと考えます。

二つ目は、衛生的な問題が発生してしまう可能性があると思うからです。

確かに、使い捨てであるレジ袋は環境に悪いのですが、衛生面では使い捨てよりも良いものはないと思います。家からエコバッグなどを持っていくより、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなどその場でもらうほうが衛生的なのではないでしょうか。また、エコバッグなどをたくさん洗濯して使いこむより、レジ袋を使って一回ずつ袋を変えたほうが安全だと思います。買った物を入れた後、買った物を入れる袋は、食材を入れることもよくあります。そんな袋だからこそ清潔にしておくべきだと、私は思います。

しかし、どんな理由があっても、プラスチック製レジ袋を廃棄することによって海が汚染されるなどの問題が起こることに変わりはありません。そこで私は、レジ袋やプラスチック製品を使いながら地球の環境を守る新たな方法を、二つ考えてみました。

一つ目は、レジ袋以外のプラスチック製品の消費を減らすという方法です。例えば、外に出かけるときはペットボトルを自動販売機などで買うのではなく、家から水筒を持っていくという工夫ができると思います。水筒でも中に入っていた飲み物が足りなくなつて後からペットボトルで買い足す、というようなこともあるかもしれませんが、最初から「外でペットボトルに入っている飲み物を買えばいいや。」とあらかじめ決めてしまうと、水筒を使うよりもペットボトルの消費が一つは増えてしまうと思います。このような小さなこと、細かいことでも気をつけて生活することで、プラスチック製品の廃棄をほんの少しでも減らせるのではないのでしょうか。

二つ目は、レジ袋の素材を変えるという方法です。最近では、生分解性プラスチックという、微生物によって分解できるプラスチックもあります。これをレジ袋に使ったほうが、環境に優しいのではないのでしょうか。この方法は今すぐ一人一人が心がければ良い、というのではないので、私には提案することしかできませんが、これも環境を守る一つの方法だと思います。

また、買った物を入れた時にもらう袋がプラスチック製でなければいけない、というのではないと思います。例えば、紙製の袋などプラスチック製ではない袋ももつと使うようにするべきではないでしょうか。

さて、ここまででは「プラスチック製レジ袋が有料化された。」というニュースから環境について考えてきましたが、人々の生活をスムーズで充実したものにすることと地球の環境を守ることを両立させることが、私は一番大切だと考えます。地球の環境を守ることは、地球を守るだけでなく、私たち人間やほかの生物、さらに何百年、何千年も先を生きる人間などの生物の生活を守ることもつながります。そんなたくさんの方々のものを守るためにも、私たち一人一人が、地球を守るより良い方法を考えるべきではないでしょうか。

## ◆ 入 選 ◆

### コロナウイルスの二次被害

東中学校

3年

神田 萌愛 かんだ もえ

私たちが、毎日のように耳にするようになった「新型コロナウイルス」。さらに最近では、「過去最多の人数」という言葉が増えて緊張感が高まる状況が続いている。

その中でも、気になったのは、「コロナいじめ」。私はこれらのニュースを聞いて胸が苦しくなった。

一つ目は、医療従事者に対する差別だ。コロナウイルスが拡大して、毎日恐怖と戦いながら治療にあたってくださる、医師や看護師、医療関係者の子どもに対して、差別をしたり、バイ菌扱いをしたりする人もいるそうだ。命がけで頑張ってくくださる方たちに対し、かける言葉や行動は「いつもありがとう」という感謝の気持ちを込めたものではないのだろうか。一方、「Friday Ovation」という医療従事者に感謝の拍手を送る取り組みをしている方たちがいるというニュースを見て私は心が温まった。一部の人だけではなく、全世界にこの取り組みが広がってほしいと思う。

二つ目は、コロナウイルスに感染した人に対する誹謗中傷だ。感染した人たちはなりたくてなったわけではない。しかし「人殺し」など心ない言葉を言われたら、どのような気持ちになるか。そもそもいつ自分が感染してしまふか分からない。怒りをぶつけるのは人ではなくウイルスに対してではないか。陽性になってしまった人たちは、周囲への迷惑を気にしたり、何か言われるのではないかと不安から精神的なダメージを受けたりしている人もいるそうだ。退院して社会復帰した人たちに対して「コロナが歩いている」「〇〇に移した」とひどいことを言われ、やせてしまった人たちもいる。そして、誹謗中傷の多くは、SNSなどを使ったインターネットだ。SNSとは、誹謗中傷のために使うのではなく、人を励ます・悩みを話す・聞くなど

と、ポジティブで、優しい世界をつくるために使うべきだと私は思う。しかし、その世界をつくることはとても難しいことだと思う。一人でも誹謗中傷を行うと、便乗して広がってしまうからだ。SNSに投稿するときは、人を傷つけないか確認することが大切だと思う。一度、ネットに上げたものは消すことができず、事件が起きてからでは遅い。誹謗中傷している人たちが、自ら気付き、思いやりがあり、優しい言葉が溢れる世界になってほしいと思う。

三つ目は、外国人に対する差別だ。これは日本人も、加害者、被害者どちらにもなっている。まず、加害者になった話では、現在感染者数一位であるアメリカ人に対して、「お前がコロナを持ってきた」や「これだから外国人は嫌いだ」という差別を一部の日本人がしているのだ。そのアメリカ人は、元々日本に暮らしており、全く関係のない人に対して差別している人がいると思うと同じ日本人として悲しくなる。次に、被害者となった話では、パレスチナに在住しているNGOで働く日本人女性二人が「コロナ」とからかわれ、髪を引つ張られ暴行されたようだ。このような話を聞くと国籍に関わらずに接することができる人が増えてほしいと強く願う。

このように、目の前のことで精一杯な私より辛い思いをしている人たちが大勢いるということを知り、コロナウイルスよりも人間の方が何倍も怖いと思った。コロナウイルスは未知のウイルスのため、きちんとした情報が分かつず振り回されてしまう。思うような行動ができない日々が続く、ストレスもたまると、戦うべき相手を間違えてはいけない。当たり前のことだが、自分が嫌なことは人には絶対にしてはいけないことを再確認して、みんなの生活も豊かになってほしい。私もできる限りのことに挑戦して、少しでも役に立ちたい。

## 正しいコミュニケーションの取り方

東中学校

3年

ふらがみ  
そうた  
 上 蒼太

「コミュニケーション」。この言葉の語源は「コミュニナス（共有する）」というラテン語の言葉です。人は互いに意思や感情を伝達し合うために、身振りや音声等を使いながら表現します。このコミュニケーションは、周りの人と関わっていく中で最も大切なものであり、誰もが関心を持っています。しかし、コミュニケーションをうまく取れるようになるために「伝える」ことばかりを重視している人が多いように感じます。コミュニケーションは「伝える」という一方方向への矢印のように見えますが、本当は「伝え合い」「聞く」という双方向への矢印のようなものだと思います。自分の思いを伝えるだけではなく、相手の思いを聞くこととお互いの理解を深めていき、人間関係を築くことができるのではないのでしょうか。

最近、「コミュニケーション」という言葉をよく耳にします。この言葉は「コミュニケーション障害者」の略語で、元々は医学用語だそうです。しかし、今では「根暗・陰キャラ・引きこもり」という意味を持つネットで使われる言葉「ネットスラング」として使われています。コミュニケーションと呼ばれる人たちは対人関係を築くことが難しく、自分の思いをうまく相手に伝えることが苦手です。しかし、その人たちが伝えたくても伝えられない思いを周りの人たちはきちんと聞くこととしていっているのでしょうか。聞く努力をせずにその人だけに原因があるかのようにコミュニケーションという言葉にまとめているのではないのでしょうか。コミュニケーションは、「伝える」ことと「聞く」ことによって成り立ちます。「伝える」ことが苦手でも、それを聞く側がきちんと理解して聞くことで、思いを受け取ることができます。そうして相手の考えや気持ちに共感し合って人間関係を築いていけるのではないかと思います。

また、最近ではコミュニケーションを取る手段として、ラインやメール等

のツールが発達しています。これらのツールは、相手と直接会わなくても思いや情報を伝達することができる便利なものです。しかし、僕はツールの発達が、「伝える」ことと「聞く」ことの上達を妨げているように思います。コミュニケーションは、表情や動作を使うことによって、言葉で表現する思いを相手に伝わり易くします。しかし、ラインやメール等では、この表情や動作まで読み取ることができません。「正しく自分の思いが伝わっているのか。」と不安になったことがある人は多いはずです。表情や動作を使えば伝えられることが、ツールによって制限され、うまく伝わらないというを生み出していると思います。コミュニケーション力は直接話すことで養うことができます。例えば、「相づちの打ち方」は「どのように打てば、思いが伝わっていることを相手に表現できるか」というように、試行錯誤していきながら上達していくものです。これらのツールの発達によって直接人と接して「伝える」機会が少なくなり、文字上のやりとりが中心になって上手にコミュニケーションが取れなくなったことも「コミュニケーション」という言葉を作り出してしまった一因かもしれません。

では、どうすれば、「伝える」「聞く」ことを大切にしていけるのか。一番大切なのは、ツールを使って、最低限の情報伝達や思いの表現をするのではなく、直接コミュニケーションを取る機会を少しでも増やしていくことなのではないのでしょうか。世間話をする時もメールやラインで話すのではなく、直接会って話す機会を作ること、自分の思いや考えを「伝える」「聞く」ことの大切さを実感できるように、更には、一人一人のコミュニケーション力を高めていくことにつながると思います。

## ◆ 入選 ◆

### 「ことば」は「心」

砂中学校

3年

奥谷 玲おくや れい

私たちの日常には「ことば」が溢あふれている。家族や友達との会話かもしれないし、本や雑誌、テレビのテロップかもしれないが、私たちが言葉を使わない日はない。私はこの「ことば」と人権には深い関わりがあると思っている。

以前、私は「ことばのかたち」という絵本を読んだ。「もしも言葉が目に見えたら、どんな形や色をしているだろう」と考えることで、日々の言葉の大切さを気づかせてくれる本だ。花のように美しく優しい言葉。相手を傷つける針のような言葉。人は、かけられる言葉によって気持ちが大きく変化する。例えば、部活動の試合で自分の全力を出し切れずに落ち込んでいたとき、仲間からの励ましの言葉に救われたり、やる気が出たりすることがある。逆に、先生や友達からのささいな一言に心がひどく痛むこともある。それくらい言葉の力は大きいのだ。

日本には「言霊ことたま」というものがある。日本では古くから、言葉には魂が宿ると信じられてきた。私も言霊は存在すると思う。言葉は思いを届けるために発せられるからだ。当然相手を傷つける言葉にも言霊は宿る。自分が思っている以上に相手を苦しめていることもあるのである。「言われたら嫌な気持ちになるようなチクタク言葉は使わないように」誰もが小学校で耳が痛くなるほど教わっただろう。やはり、大切なのは思いやりなのだ。

また、文字で書く言葉も、話し言葉と同じように思いやりを持って扱わなければならぬ。今年五月、女子プロレスラーの方が、SNSでの誹謗中傷ひぼうちゅうけうを苦にして自殺してしまうという出来事があった。私はこのニュースを目にしたとき、心の底から腹が立った。なぜ言葉によって人が亡くならなければ

いけないのか。女子プロレスラーの方へ悪意のあるメッセージを送った人は「自分の意見を言っただけ」「読んだらどう思うかは考えていなかった」とコメントしていた。直接相手の顔が見えないため、どんな内容でも自分の思ったことをためらわずに発言できてしまう。これがSNSの恐ろしいところだ。七月に亡くなった俳優の方も、芸能人の行動に対して世間が一斉にバッシングをする風潮に疑問を感じており、SNSでは意見も述べていた。しかし、俳優の方のその発言に対する心無い批判も多かったそうだ。

文字で自分を否定されることはとても辛いことだ。人間は、情報の九割程度を視覚から得るそうだ。そして、「聞く」より「見る」方が記憶に残るとも言われている。たった一言がずっと心に刺さり続け、その人を死へ追い込んでしまうかもしれないのだ。

現在、SNSの発達はすさまじく、世界中の誰とでも気軽にやりとりができる。しかし、画面の向こう側にいるのは、自分と同じ人間だということを忘れてはいけない。

これらの出来事から私たちが学ばなければならないのは、自分の言葉に責任を持つということではないだろうか。SNSに限らず、周りの人への発言を一度見直してみしてほしい。毎日当たり前のように使う言葉だからこそ、その重要さや相手に与える影響をよく考えなければならぬと思う。

「ことば」は「心」を表す。そして「ことばの重み」は「いのちの重み」だ。受け取ったときに、ふっと笑顔が生まれるような言葉を届けていきたいと思う。

## 命の差と共生

川越西中学校

2年

佐藤 理恵さとう りえ

「殺処分」この言葉を知っている人は、数年前に比べてだいぶ増えたように感じる。それでも、保健所や愛護センターに持ち込まれた動物たちの最期を詳しく知っている人は少ない。

持ち込まれた動物たちは主に、密閉された部屋に二酸化炭素を流し込まれて命を終えた後に、焼却処分をされる。決して安楽死ではなく、窒息死をさせられる。それも、すぐに終わるわけではなく、小さい子達は特に十分に上苦しみながら息絶えていく。

かわいい服に高級なご飯、温かいベッドを与えられ、幸せな一生を過ごす命。必要がないと言われ、最後の最期まで苦しんでいく命。同じ命なのに、なぜここまで差があるのだろうか。

コロナ禍で自粛生活が長引き、動物との触れ合いや温もりを求めて、動物を迎える人が増えているらしい。しかし、動物と暮らす上での苦勞を知らず、勢いで購入してしまうケースも増えている。動物と暮らすということは、想像以上に大変なことである。

例えば、「飼いやすい」と言われるハムスターは、暑さにも寒さにも弱い。暑いと熱中症になってしまったり、寒いと冬眠してしまい、そのまま目覚めないこともある。夜は回し車の音でうるさいし、掃除も大変だ。犬の場合は、トイレを覚えない、うるさい、かむなど、問題行為を起こして、保健所などに持ち込まれるケースがある。ペットショップで購入されて二日で持ち込まれたこともあるそうだ。ぬいぐるみやおもちゃと同じように考えて迎えてしまおう人が後を絶たない。こういった人たちの持ち込みも、処分が増える原因

の一つである。

私が動物と暮らし始めたのは小五のとき。セキセイインコの「ソラ」を迎えた。ソラは、うちに来てからほとんどご飯を食べなかった。お迎えして一週間もしないうちに投薬生活が始まった。正直とても大変だった。ご飯を細かくしたり、常に室温を気にしていたりした。それでも、今では完治して、元気に暮らしている。中一のときに迎えたチンチラの「マロ」は、夜行性だから、夜中すごくうるさくて眠れないほどだった。今では慣れたが、飼う前には眠れなくなるほどうるさいとは考えもしなかった。動物を迎える前に、たくさんネットで調べて、知識をつけていたつもりだった。それでも、考えもしなかったことがたくさんあり、ときには後悔することもあった。しかし、手放そうと考えたことは一度もなかった。

SNSに載っている幸せそうな動物と人間の写真は、大変なことの中での幸せの一部分を切り取ったものである。しかし、その幸せの一部分だけを見て、大変な部分を知らないまま安易に生き物を迎えてしまうと、「こんなはずじゃなかった」となってしまう。

殺処分される動物たちの大半は、「こんなはずじゃなかった」と持ち込まれた子たちだ。動物からしてみれば、人間の都合なんて知らない。今を必死に生きているのだ。問題があるのは動物ではなく、人間の方である。

動物たちは、愛情を与えた分だけ返してくれる。言葉は話せなくても、全身で喜びを表現して、小さな目で話しかけてくれる。

命の差を無くして、どんな動物も「共生」していけたらいいと思う。



## 【選評】

審査員長 川越西中学校教諭 中野 由紀子

「川越市少年の主張作文」は、川越市青少年を育てる市民会議・川越市・川越市教育委員会が主催する作文コンクールです。当コンクールは青少年が日常生活の中で考えていること、感じていることを広く社会に訴えることにより、同世代の青少年の意識啓発と、青少年の健全育成に対する大人の理解と関心を高めることをねらいとして、昭和六十二年度から実施しています。

また、最優秀賞・優秀賞の作品は次年度に開催が見込まれる青少年育成埼玉県民会議等が主催の「青少年の主張大会」に推薦され、当大会の中学生の部最優秀賞受賞者は、さらに独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会」への出場候補者として推薦されることとなります。

歴史と重みのある当コンクールにおいて、今年度は中学生の部に百五十九編の応募がありました。その中から、審査の結果、七編の入選作品が決定いたしました。

今年度の応募作品には、新型コロナウイルス感染症対策により、一斉臨時休校の中で始まった令和二年度を象徴するにふさわしく、応募作品のテーマには新型コロナウイルス感染症及びそれに関わる社会の諸問題を取り上げたものが数多くありました。新型コロナウイルス感染症に端を発した「差別」「誹謗中傷」「新しい生活様式」というキーワードについて、子供たちが何を感じ、何を考えていたのか、審査を通して我々が学ぶところもありました。また、昨年と同様に「環境」「AI」について考えた作品も多数あり、関心の高さを知ることが出来ます。何かを「主張」する作品というものは、自分の意見に自然と説得力が備わっているものです。美しい言葉、整った言葉だけでなく、そこに「自分」の存在を感じさせる、そのような作品を今後も待ち望んでいます。

入選作品の内、上位三作品は次の通りです。

最優秀賞 井田 灯南さん 「臨時休校を経て伝えたいこと」

優秀賞 井田 那南さん 『地球の環境を守る』とは」

優秀賞 奥富 晴菜さん 「楽に生きよう」

最優秀賞の井田灯南さんの「臨時休校を経て伝えたいこと」は三ヶ月の臨

時休校を経て感じた「日常の有り難さ」をきっかけとして世界に目を向け、「学校という場で学べる喜び」に焦点を当てたものです。本作品を通して、中学生にとって、新型コロナウイルス感染症は「日常」を再び考えさせ、世界の現状を感じさせるものであったのだと伺い知ることが出来ます。丁寧で温かい口調の中に、中学生らしい素直な主張が感じられる作品です。

優秀賞の井田那南さんの『地球の環境を守る』とは「はレジ袋有料化という環境対策に「反対」という立場を表明し、その理由及び対案を示したものです。主張が明確でまとまっており、読みやすく、論の展開が巧みであると感じました。また、反対という意見表明にとどまることなく、中学生の視点から対案を示したのは特筆すべきことでしょう。故に読後「自分に何ができるのか」を考えることが大切なのだと思わせる作品となっていました。

同じく優秀賞の奥富晴菜さんの「楽に生きよう」は、おそらくどの中学生も一度は抱いたことのある「中学生は忙しい」という実感から、よりよく「休む」方法について考えていく作品です。「日本全体が忙しい人であふれている。」という言葉は、中学生だけでなく、我々大人の心をも鋭く突くものです。いわゆる拘束時間という視点だけでなく、心の問題も見つめ、これからの社会を生き抜く術を探す姿に、未来へと駆けていく青少年の力強さを感じました。

他の入選作品も、社会に対して感じる己の率直な「疑問」から始まり、確固とした主張が見られるものが多くあります。子供から大人へと成長する多感なこの時期だからこそ、青少年の皆さんにはこの作文集を通して同世代の主張に触れ、作品の向こう側にいる「人」と対話し、自らの考えを整理し深化させていくください。

新型コロナウイルス感染症により、日々めまぐるしく変わる社会情勢の中で、未来を生きる青少年は日々さまざまなことを感じ、考えています。彼らの心のうちにある確かな主張を真摯に受け止め、さらによりよい社会を築くために、皆様に一読いただければ幸いです。